

俳句通信

特別作品20句 今瀬剛一「黴びつづけ」

特集I 〈超結社句会 12番勝負〉

ホスト 星野高士 藤本美和子

I ゲスト 角谷昌子・岸本尚毅
津高里永子・鳥居真里子II ゲスト 小野あらた・西村麒麟
前北かおる・森下秋露

特集II 〈『山崎千枝子全句集』を読む〉

第一句集「素顔」を読む 佐藤 風

第一句集「素顔」時代の拾遺を読む 根橋宏次

第二句集「日の翼」を読む 鈴木五鈴

第二句集「日の翼」時代の拾遺を読む 富田正吉

第三句集「森の扉」を読む 小山雄一

第三句集「森の扉」時代の拾遺、それ以後の句を読む 蔵多得三郎

【新連載】俳画を巡る旅

江戸時代の生活と芭蕉俳画「山吹や」
——松浦澄江

●作品● 山下美典・関森勝夫・田島和生・栗林 浩・澤 好摩・中村雅樹・藤田直子・高山れおな・村上朝彦・柴田洋郎・藤巻まさ志・宮城梵史朗・谷中隆子・衣川次郎・坂内佳織・加賀城燕雀・山田真砂年・橋本真夫・大石雄鬼・大橋一弘 ほか

初秋

浅間山麓

写真／樋口二成



桔梗 やきりりと辛き飛驒の酒 草間時彦

桔梗

九月、台風一過。すっかり涼しくなっているものの相棒と鳥取県の千代川へヘラブナ釣りに出かけた。釣り場は増水気味で笹濁りしており期待出来そうだ。

釣り始めると直ぐに尺前後のヘラブナが順調に釣れ、相棒と早々とティータイム。コーヒーを飲みながら横を見ると雑草の影に遠慮気味に桔梗が咲いている。秋だ、などとのんびりした気分していると、不意に後ろでコトコトと音がした。振り返ると私の釣り竿がスイスイと川の中へ走って行く。流れは速く釣り竿は直ぐに諦めた。

ところが、相棒が素早く服を脱ぎ捨てドボンと飛び込んだ。危ないから止めるように言ったが聞こえない。みるみる下流へ流され、岸から迫り出した柳の影で見えなくなった。レスキューを呼ぼうかと携帯を取り出すと、「釣れてるぞー」と得意げな声。柳の影から胸まで浸かって流れに逆らいながら釣竿を担いで帰って来た。

ほっとするやら呆れるやら、「ありがとう」と言うとき得意満面。釣り餌が付いて薄汚れたタオルでそそくさと体を拭き、散らばった服を着込んで何事も無かったように自分の釣り座へ戻った。
踏み荒らされた雑草の中に桔梗は見当たらなかった。

絵・文 杉原武弘



特別作品

20句

黴びつづけ

今瀬剛一

昨日より今朝の緑の旅にあり

竹皮をふるひ落として伸びるなり

ひとり生き残りし写真黴びつづけ

口あけて待つは燕の子に似たる

白牡丹蜂のぶつかる音のして

特集Ⅰ

「超結社句会 12 番勝負」

ホスト

星野 高士（「玉藻」主宰）

藤本美和子（「泉」主宰）

好評の超結社句会を2本立ての特集としました。
実力作家にお集まりいただきましたⅠ、
若手人気作家にご参加いただきましたⅡ。
たっぷりとお楽しみください。



藤本美和子氏



星野高士氏

特集Ⅱ

『山崎千枝子全句集』を読む



著者略歴 山崎千枝子(やまざき・ちえこ)

昭和17年(1942)9月23日 富山県に生まれる

昭和54年(1979)「河」に投句

昭和57年(1982)「朝霧」創刊入会

その後「朝霧賞」「朝霧俳賞」受賞

平成7年(1995) 松本陽平主宰逝去により「朝霧」終刊

平成8年(1996)「燎」創刊 燎俳句会代表となる

令和2年(2020)3月27日没

句集『素顔』『日の翼』『森の扉』

共著『大学生の俳句百選・若人の四季』

2020年3月27日に79歳で亡くなった山崎千枝子氏の全句集が、
2年後のこの3月に弊社より刊行されました。

残された3つの句集と拾遺を6人の方に読んでいただきました。